

足袋蔵とは？

足袋の原料や製品を保管していた倉庫を、行田では足袋蔵と呼んでいます。現在市内には約80棟もの足袋蔵が存在しています。足袋は秋口から春先にかけて需要が増えるので、それに備えて足袋商店は原料や製品を足袋蔵に保管して置き、生産量、出荷量を調整していました。余り頻繁に荷物の出し入れがないこと、城下町特有の短冊型に細長い敷地に建てられることが多かったことから、足袋蔵は大抵敷地の一番奥に建てられています。足袋蔵は、ミシンが導入されて足袋生産量が急増して行った明治30年代以降に建設が本格化し、ナイロン靴下が普及して足袋の需要が急速に減少して行った昭和30年代前半で建設が途絶えました。土蔵だけでなく、大正時代以降は石蔵、モルタル蔵、コンクリート蔵、木造倉庫、レンガ蔵など多種多様な足袋蔵が建てられています。大きさ、意匠もさまざまで、ひとつひとつに個性があります。蔵めぐりまちあるきをしながら、お気に入りの足袋蔵を見つけてみてください。

② 牧禎舎

行田市忍1-4-11 (TEL.048-553-5800)

日曜日の10:00~16:00開館、
藍染体験は有料



「傘」の商標で足袋・被服の製造を行っていた牧禎商店が、創業に伴い昭和15年(1940)に建設した木造二階建ての事務所兼住宅と工場です。事務所兼住宅は落ち着いた佇いの住宅建築で、欄間等の造りに当時の足袋商店の繁栄振りが伺えます。現在はNPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークによって藍染体験&アーティストシェア工房として再活用されています。

④ 牧野本店・足袋とくらしの博物館

行田市行田1-2 (TEL.048-552-1010)

博物館は土・日曜日の10:00~15:00開館、
入館料大人200円、小人100円、店蔵は外観見学のみ



「力弥足袋」の商標で知られた牧野本店の店舗兼住宅は、大正13年(1924)頃に建てられた行田を代表する“半蔵造り”の店蔵です。右脇の木造洋風2階建ての工場は、大正11年(1922)に棟上されたもので、現在はNPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークによって、「足袋とくらしの博物館」として再活用されています。全盛期の行田の足袋工場の様子を再現した館内で、足袋づくりの実演見学や、「My足袋づくり」体験(要予約)をすることができます。

足袋蔵歴史のまちガイドブック

足袋蔵と 行田市の 近代化遺産



～蔵めぐり・まちあるき～

「足袋蔵のまち行田へようこそ！」

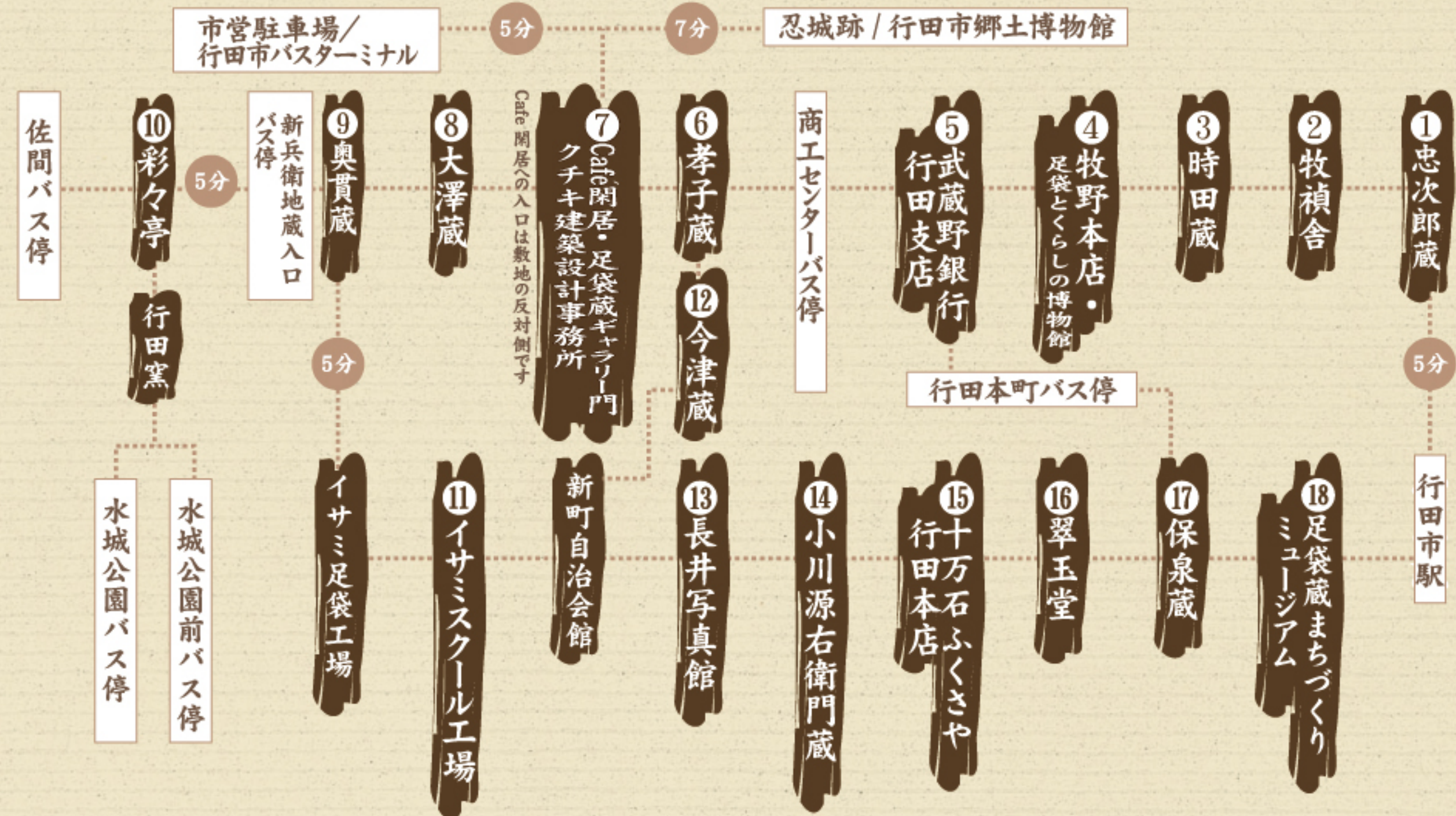
行田市では江戸時代中頃から足袋づくりが盛んになり、明治20年代以降は足袋産業が発展、最盛期の昭和13年には年間約8500万足、全国シェアの約8割の足袋を生産する“日本一の足袋のまち”として繁栄しました。

市の中心部には、“足袋蔵”と呼ばれる個性的で趣のある足袋の商品倉庫を中心に、モダンな洋風足袋工場、北側～西側だけを蔵造りにした行田独特の“半蔵造り”とでも言うべき店蔵や住宅など、足袋産業の栄華を伝える近代化遺産が数多く残されています。

現在行田市ではそうした近代化遺産の保存・再活用が進められており、武蔵野銀行行田支店店舗、十万石ふくさや行田本店店舗、大澤家旧文庫蔵などが国登録有形文化財に登録されています。また、忠次郎蔵、彩々亭、足袋蔵まちづくりミュージアム、足袋とくらしの博物館、牧禎舎、Cafe閑居・足袋蔵ギャラリー門、翠玉堂など新たな形での再活用も行われています。ぜひこのガイドブックを片手に、足袋蔵のまち行田を“蔵めぐり・まちあるき”してみてください。

足袋蔵めぐりモデルコース

※特記以外のそれぞれの場所へは
いずれも徒歩2〜3分の距離です



行田市内の近代化遺産へのアクセス

- 秩父鉄道行田市駅下車 ■ JR高崎線「行田駅」より市内循環バスで、行田市バスターミナル下車
 - JR高崎線「吹上駅」より朝日バス行田折返し場行きで、行田本町下車
- ※ぶらっとぎょうだ、行田市郷土博物館で観光レンタサイクルの貸出を行っています。

① 国登録有形文化財
旧小川忠次郎商店舗及び主屋(忠次郎蔵)
行田市忍1-4-6 (TEL.048-556-9988)
店舗利用以外は外観見学のみ

足袋原料問屋小川忠次郎商店の店舗兼住宅として大正14年(1925)に棟上された二階建ての土蔵造りの店蔵です。蓮華寺通りに面して店舗が建ち、その後ろにL字形に住宅部分が繋がっています。住宅部分は北側だけを土壁にした行田独特の“半蔵造り”です。この店蔵は足袋蔵再活用のモデルとして整備され、現在はNPO法人忠次郎蔵によって、手打ちそば店「忠次郎蔵」として再活用されています。



⑬ 足袋蔵まちづくりミュージアム
(行田市観光ガイドステーション)
行田市行田5-15 (TEL.048-552-1010)
毎日10:00~16:00開館(無料)

この間口5間、奥行3間の二階建ての土蔵は、「旗印足袋」、「小町足袋」の商標で知られた栗原代八商店が、明治39年(1906)に日露戦争後の不景気で仕事を欲しがっていた職人に作らせた、と伝えられる足袋蔵です。現在はNPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークによって、観光案内所兼まちづくり情報センターとして再活用されています。足袋蔵等についての問合せはこちらに。



③ 時田蔵

外観見学のみ

「神武足袋」、「かるた足袋」等の商標で知られた時田啓左衛門商店が大正時代頃に建設した足袋蔵です。この奥にも明治36年(1903)竣工の足袋蔵が並んでいます。この土蔵は左側にある昭和15~16年(1940~1941)頃建設の住宅と繋がる行田では珍しい表通りに面した袖蔵形式の足袋蔵です。なお、時田啓左衛門商店は忠次郎蔵の向かい側にも昭和4年(1929)に大型の時田足袋蔵(土蔵)を棟上しています。



⑤ 国登録有形文化財 武蔵野銀行行田支店店舗

銀行利用以外は外観見学のみ

市中心部に位置する鉄筋コンクリート造2階建ての本格的銀行建築です。忍貯金銀行の店舗として昭和9年(1934)に竣工しましたが、戦時中に行田足袋元売販売株式会社が建物を買収しました。戦後足袋組合(足袋組合の会館)となり、昭和44年(1969)から武蔵野銀行行田支店となっています。県内でも数少ない戦前の銀行建築であり、足袋産業とも深く関わる行田を代表する近代化遺産です。



⑥ 孝子蔵

外観見学のみ

江戸時代以来の短冊形の細長い敷地の奥に建てられた間口4間、奥行2間半の足袋蔵です。この2階建ての石蔵は、「孝子足袋」の商標で知られた大木末吉商店が昭和26年(1951)に棟上したもので、当時は木材不足で、主柱を建てずに大谷石を積み上げて壁を造り、その上に屋根を乗せています。窓も大谷石の引き戸です。戦後の行田を代表する足袋蔵のひとつです。



⑦ Café閑居・足袋蔵ギャラリー門・クチキ建築設計事務所

店舗利用、ギャラリー開館時以外は外観見学のみ

写真は「ほうらい足袋」、「栄冠足袋」の商標で知られた奥貫忠吉商店が大正5年(1916)に棟上した二階建てと三階建ての足袋蔵です。敷地内には昭和5年(1930)棟上の住宅、明治43年(1910)棟上の足袋蔵(土蔵)等も残されています。現在住宅がカフェに、足袋蔵がギャラリー、パン屋、事務所等各々再活用されています。ギャラリーでは不定期ながら展覧会等が開催され、貴重なアート発信の場となっています。



⑧ 国登録有形文化財 大澤家住宅旧文庫蔵(大澤蔵)

外観見学のみ

行田で唯一の鉄筋コンクリート組煉瓦造2階建ての足袋蔵で、「花型足袋」の商標で知られる大澤商店が大正15年(1926)に竣工させたものです。間口4間半、奥行2間半の行田では珍しい袖蔵形式の蔵で、南隣には昭和3年(1928)竣工の木造二階建ての住宅が、後ろには明治時代末頃建設の足袋蔵が続いています。いずれも当時の足袋商店の栄華を伝える貴重な近代化遺産です。



⑨ あんど(奥貫蔵)

店舗利用以外は外観見学のみ

表通りに面して建つ白壁が美しいこの間口9間、奥行3間の2階建ての大型の土蔵は、「ほうらい足袋」、「栄冠足袋」の商標で知られた奥貫忠吉商店が、大正時代~昭和初期頃に建設したと伝えられる足袋蔵です。足袋生産量の増加と共に大型化した足袋蔵の代表例で、足袋産業全盛期を象徴する近代化遺産と言えます。現在は蕎麦・創作料理の店「あんど」として再活用されています。



⑩ 国登録有形文化財 (彩々亭) 旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館

店舗利用以外は外観見学のみ

「穂国(ほこく)足袋」の商標で知られた荒井八郎商店の「足袋御殿」と呼ばれた美しい庭園を持つ豪邸です。写真は昭和12年(1937)棟上の木造洋風2階建ての事務所兼主屋で、左手に昭和元年(1926)建設の木造和風平屋の大広間棟と、昭和7年(1932)建設の木造洋風3階建ての洋館が続いています。現在は「あんど」の店舗として再活用されています。



⑪ イサミスクール工場

外観見学のみ(敷地内立ち入り禁止)

現存する行田で最も歴史のある大規模足袋工場が、このイサミコーポレイションのスクール工場です。中央のノコギリ屋根の木造洋風工場が大正6年(1917)、入口右側の旧事務所が大正7年(1918)、入口左側のモルタル造の足袋蔵が昭和13年(1938)に棟上されています。そのほかにも足袋蔵(土蔵)、旧講堂、旧寄宿舎食堂、ポンプ小屋等があり、戦前の大規模足袋工場の姿を良く留めています。



⑫ 今津印刷所(今津蔵)

外観見学のみ

江戸時代後期~末期の建設と思われる現存する行田最古の店蔵で、店舗後ろの住宅部分は「半蔵造り」になっています。今津印刷所は江戸時代の元禄年間(1688~1703)創業と伝えられる老舗印刷所で、店蔵の後ろには味噌蔵が続いています。山田花袋の小説『田舎教師』に登場する「行田印刷所」のモデルになった印刷所であり、当時の活版印刷機も店蔵内に残されています。



⑭ 小川源右衛門蔵

外観見学のみ

近江商人の小川源右衛門商店(カネマル酒店)が昭和7年(1932)に建設した、間口4間、奥行8間の大谷石組積造2階建ての商品倉庫です。この石蔵の建設には約1,100本もの大谷石の切石が使われています。屋根は大正初期以降の行田の蔵に多い洋小屋組みが採用されています。足袋蔵ではありませんが、昭和初期の行田を代表する大型の石蔵と言えます。



⑬ 長井写真館

店舗利用以外は外観見学のみ

行田では数少ない木造洋風建築で、大正時代にフチイ写真館の店舗兼住宅として建設されました。その後所有者が変わりましたが、写真館のまま引き継がれています。1階が住宅、2階がスタジオです。北側は急勾配の屋根が1階まで伸びていて、そこにスタジオの大きな明かり取りの窓が開けられています。内部もモダンな洒落たデザインで、大正時代の雰囲気良く残っています。



⑯ 翠玉堂

イベント等見学、店舗利用以外は外観見学のみ

木造2階建ての商家建築のこの店舗は、元は山田荒物店の店舗で、昭和4年(1929)に建設されたと伝えられています。約20年程前に山田荒物店が閉店して以降は、家具店、甘味処、喫茶店と目まぐるしく変わり、現在は天然酵母パンのお店になっています。パン屋としての営業だけでなく、毎月1回店内でアートイベントが開催されているほか、不定期で展覧会なども行われています。



⑮ 国登録有形文化財 十萬石ふくさや行田本店店舗

店舗利用以外は外観見学のみ

十萬石の本店として知られるこの黒漆喰塗りの重厚な店蔵は、元は呉服商山田清兵衛商店の店舗として明治16年(1883)に棟上げされたものです。行田では珍しい江戸様式の店蔵で、昭和27年(1952)に青柳合資会社の足袋蔵となり、昭和44年(1969)から十萬石の店舗となりました。昭和53年(1978)に改修が行われ、外壁にナマコ壁が設けられています。行田を代表する店蔵と言えます。



⑰ 保泉蔵

外観見学のみ

城下町特有の短冊型の細長い敷地に並ぶ、行田一の足袋原料商であった保泉商店の足袋蔵群です。国道に面した石造の店蔵が昭和元年建設、その後の小型の土蔵が明治後期の建設と推測されています。次の大型の土蔵が大正5年(1916)建設、一番後ろの石蔵が昭和7年(1932)棟上です。このほかに東側にモルタル蔵1棟があります行田を代表する蔵並みと言えます。



文化財めぐりに、観光レンタサイクルをご利用下さい(無料)
市内の6カ所貸出しています。この6カ所であれば、返却は、どこでもOKです。
★観光案内所 ★古代達の里
★郷土博物館 ★ほにわの館
★さくらメイト ★ぶらっとよぎょうだ

- 蔵(足袋蔵)
- 歴史ある建物
- 足袋工場
- WC お手洗い
- 市内循環バス停留所
- 路線バス停留所
- おすすめ見学コース

行田窯
昭和初期頃の建設と思われる荒井八郎商店の二階建ての足袋蔵の一部を再活用した陶芸工房です。市内に残る数少ない木造の足袋蔵のひとつです。

イサミ足袋工場
イサミコーポレイションの昭和初期建設と伝えられるノコギリ屋根の木造洋風足袋工場です。昭和初期の足袋産業郊外進出を物語る近代化遺産です。

道端にひっそりと道祖神がたざんでいます。

地図の見方